

これならわかるぜ！

## ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の基本構造編

### 【第7回】 接続詞編

漢文の基本構造を理解する上での、最後の講義がこの「接続詞編」だ。  
みんなあと一踏ん張りだぞ。

#### 1. 接続詞

**接続詞は、語と語をつなぐ、句と句をつなぐ、文と文をつないで、その関係を示す働きをする語なんだ。**

それがまず基本、一番大事なことだよ。

接続詞は、並列や順接、因果関係、譲歩、仮定、選択など、さまざまな関係を示すんだ。

だから、かなり色々な種類がある。

ここでは代表的なものを紹介するにとどめるけど、中には君らが「え？これって接続詞なの？」って言い  
たくなるものもあるぜ。

たとえば？って？

うん、じゃあ、一番へ？って思う奴。

たとえば「如」とか「若」は、「もし」と読んで仮定を表すけど、これも接続詞なんだ。

副詞じゃないの？って思った君、それは日本語の話。

前句で「もしくたら」と仮定を表して、後句とつなぐんだから接続詞なんだよ。

語と語をつなぐ、句と句をつなぐ、文と文をつなぐ、それが接続詞の働き。

いいかな？

#### 2. 接続詞「而」

接続詞の中で、君達が一番最初に出会ったのが、たぶんこの「而」だね。

ほら、文頭では「しかシテ」とか「しかレドモ」と読むけど、文中では置き字にして読まないとか。

また、順接と逆接の2つの意味があって、それに応じて読み方を変えたり、置き字の場合も直前に読む語  
の送り仮名を変えるときか。

色々ややこしいことを習ったのは、たぶん置き字について教わる時間だったろ？

まあ、訓読の約束はマスターしとかなきゃならん。

それはそれで大切だからな。

でも、実は授業では訓読のルールの方に重きを置かれがちで、接続詞「而」の働きのほんの一部しか習っていないんだな、残念ながら。

さて、その日本人だけのルール、最初に押さえるところか？

いいかい？まず、基本として、「而」を読む時は、文頭で用いられてる時。

**並列とか順接の時は「しかシテ」とか「しかウシテ」と読む。**

**逆接の場合は、「しかルニ」とか「しかレドモ」「しかモ」なんて読む。**

これはあくまで一応だ。

え？一応ってどういうことって？

だって、現実には逆接の時だって「しかシテ」って読んでる場合もあるぞ。

なんで！って怒りたくなるかもしれないが、これはむしろ日本語の幅だな。

だって、君らだって「叱られるが泣かない」を「叱られて泣かない」って言ったろ？

別におかしくはないだろ？

日本語には幅があるんだ、そんなに力チ力チじゃないんだよ。

それと、これまた困ったことに、文中の「而」は置き字にして読まない約束なのに、わざわざ「しかシテ」とか「しかレドモ」と読む人があって、教科書や参考書、問題集なんかでも結構よく見かけるぜ。

君達も見たことがないかい？

それはたぶん日本語としての語調がよくてそうなってるんだと思うんだが、あくまで日本人の都合に過ぎないんだよ。

昔、教科書の先生用の解説書に、本文は「しかシテ」とことさらに改めて読んでるので、強意を表していることがわかるなんて、まことしやかに解説してあって、めっちゃびっくりしたことがある。

もちろん、真っ赤な嘘だぜ。

いったい誰の強意だよ、訳した日本人だろ？

読むか読まないかは日本人の問題、中国人はいつでもちゃんと読んで発音してるよ。

文中の「而」の場合の読み方は、後で説明するぜ。

◎ポイント！…文頭に置かれた「而」は、次のように読む。

・並列・順接 … しかシテ・しかウシテ「

逆接 … しかルニ・しかレドモ・しかモ

さて、「而」の働きは、もちろん語と語、句と句、文と文をつなぐことにあるんだけど、これが結構多彩なんだ。

その中でも特に重要なのが、並列、順接、逆接、連用修飾の働きだよ。

### ① 接続詞「而」（並列の関係）

まず、**並列の関係**から例を挙げようか。

え？並列？順接じゃないんですか？って？

うん、順接じゃない。

これは前の語と後の語、あるいは前の句と後の句が、ただ横並びになっただけの関係をいうんだよ。

### 宰予之辞、雅而文也。

▼宰予の辞は、雅にして文なり。

▽宰予の言葉遣いは、上品で美しい。

この例の「而」は、「雅」と「文」という前後2つの語を、ただ横並び、つまり並列の関係で接続してるんだ。

ここでは「而」が文中で用いられているから、置き字として扱って読まず、前に読む形容詞「雅」を日本語のナリ活用形容動詞「雅なり」として、その連用形の「雅に」に日本語の接続助詞「して」をつけて読むんだ。

勘違いすんなよ、日本人が勝手に「而」を読まないだけで、中国人は文頭にあるのが文中にあるのが同じ発音でちゃんと読んでるんだぜ。

### 秦疆而赵弱。

▼秦は疆くして赵は弱し。

▽秦の国は強くて趙の国は弱い。

これは、「秦疆」と「赵弱」という2つの句を並列の関係で接続してる。

ここでも「而」は置き字扱いで読んでない。

これらの例は、別に前の語と後の語の関係、前句と後句の関係に因果関係はなく、ただ横並びになっただけだよな。

だから、並列または単純接続というべきで、順接の関係ではない。

◎ポイント…接続詞「而」は、語と語や句と句、文と文をつないで、並列の関係を表すことがある。この場合、接続される語や句、文は単純に接続するだけで、因果関係や逆接などの意味はこもらない。

・訓読では、文中においては「而」を置き字として読まず、直前に読む語に「テ」「や」「シテ」などをつけて読む。

## ②接続詞「而」（順接の関係）

次に、**順接の関係**だ。

つまり、前の内容を受けて、次の内容になるという因果関係がある場合だよ。

亡<sup>ヒ</sup>羊<sup>ヨ</sup>而<sup>シ</sup>補<sup>フ</sup>牢<sup>ヲ</sup>、未<sup>ダ</sup>為<sup>ル</sup>遅<sup>シ</sup>也<sup>ト</sup>。

▼羊を亡<sup>ヒ</sup>ひて牢を補<sup>フ</sup>ふも、未<sup>ダ</sup>遅<sup>シ</sup>と為<sup>ル</sup>ざるなり。

▽羊を逃がしてから囲いを補修しても、まだ遅くはないのだ。

この例の場合、「而」は**時間の前後**を表してるんだ。

「くしてから・くした後で」「または単に「くして」と訳す。

「羊を逃がす」という事実の後で「囲いを補修する」という行為が行われるわけだな。

虞<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ニ</sup>百里奚<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>亡<sup>シ</sup>秦<sup>ノ</sup>繆<sup>ノ</sup>公<sup>ハ</sup>用<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>霸<sup>ス</sup>。

▼虞は百里奚<sup>ヲ</sup>を用<sup>ハ</sup>みずして亡<sup>シ</sup>び、秦<sup>ノ</sup>繆<sup>ノ</sup>公<sup>ハ</sup>は之<sup>ヲ</sup>を用<sup>ハ</sup>みて霸<sup>ス</sup>たり。

▽虞の国は百里奚を用いなかったので滅び、秦の繆公は彼を用いたので覇者となった。

今度は**原因と結果**の関係を表す例だ。

「くしたので・くしたために・くしたおかげで」などと訳す。

ここでは「百里奚を用いる・用いない」を原因として、「滅ぶ・覇者となる」という結果になることを示している。

原因と結果を表す「而」が文中で用いられている場合も、訓読では通常、前に読む語に「テ」とか「シテ」をつけて読む。

でも、文の意味から「くスレバ」と読んだ方がわかりやすい場合もあるだろう？  
だって、「已然形＋ば」は「くノデ」って意味を表すからな。  
だから、右の例も「百里奚を用ゐれば」と読んでもいいわけだ。  
要するに日本語の問題だな。

◎ポイント…接続詞「而」は、順接の関係を表すことがある。先に述べられた内容と後の内容に、時間の前後の関係、あるいは原因と結果の関係がみられる用法である。

・訓読では、文中においては「而」を置き字として読まず、直前に読む語に「テ」や「シテ」などをつけて読む。

### ③ 接続詞「而」（連用修飾の関係）

述語を連用修飾する代表格は副詞だよな。

今度は「而」を用いた句が、副詞の位置に置かれて述語を連用修飾する用法を説明しよう。

普通、教室では「而」は順接か逆接としてしか説明されないんだが、実はこの用法が非常に多いんだよ。

吾<sup>ワ</sup>恂<sup>ジュン</sup>恂<sup>ジュン</sup>而<sup>ニ</sup>起<sup>キ</sup>、視<sup>シ</sup>其<sup>キ</sup>缶<sup>フ</sup>而<sup>ニ</sup>吾<sup>ワ</sup>蛇<sup>ヘ</sup>尚<sup>ホ</sup>存<sup>ソン</sup>、則<sup>スレバ</sup>弛<sup>シ</sup>然<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>臥<sup>ス</sup>。

▼吾<sup>われ</sup>恂<sup>じゆん</sup>恂<sup>じゆん</sup>として起<sup>お</sup>き、其<sup>そ</sup>の缶<sup>ぶ</sup>を視<sup>み</sup>て吾<sup>わ</sup>が蛇<sup>へ</sup>尚<sup>ほ</sup>存<sup>ぞん</sup>すれば、則<sup>すなは</sup>ち弛<sup>し</sup>然<sup>ぜん</sup>として臥<sup>ふ</sup>す。

▽私はびくびくしながら起き上がり、そのかめの中を見て私の蛇がまだいれば、ほっとして寢床に戻る。

「恂恂」は、心配してびくびくするさま。「弛然」は、気の緩むさまを表す形容詞性の語だよ。

これらに「而」をつけることで、それぞれ「びくびくして」「ほっとして」という句を作って、述語の「起」「臥」を連用修飾してるんだ。

「びくびくして」、そして起きる」「ほっとして」、そして寝る」という並列や順接の意味じゃないぜ。

（師）循<sup>ジュン</sup>海<sup>カイ</sup>而<sup>ニ</sup>歸<sup>ル</sup>。

▼（師）海<sup>うみ</sup>に循<sup>したが</sup>ひて歸<sup>かへ</sup>る。

▽（軍隊が）海に沿って帰る。

「而」は、句と共に用いて状況だとか方策を表す連用修飾句を作ることもあるぞ。

ここでは「循<sup>ル</sup>海<sup>ニ</sup>」という句と共に用いられて述語「帰<sup>ル</sup>」を修飾してるんだ。つまり、「海に沿うというルートで」とか「海沿いに」帰るって方策を示してるんだな。「海に従う、そして帰る」じゃないんだよ。

(荔枝) 若<sup>シ</sup>離<sup>レ</sup>本<sup>ノ</sup>枝<sup>ヲ</sup>、一<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>色<sup>ニ</sup>変<sup>フ</sup>、二<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>香<sup>ニ</sup>変<sup>フ</sup>、三<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>味<sup>ニ</sup>変<sup>フ</sup>、四<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>外<sup>ハ</sup>、色<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>味<sup>ヲ</sup>尽<sup>ク</sup>去<sup>ル</sup>矣<sup>。</sup>

▼(荔枝) 若<sup>シ</sup>本<sup>ノ</sup>枝<sup>ヲ</sup>を離<sup>レ</sup>ば、一<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>色<sup>ニ</sup>変<sup>フ</sup>じ、二<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>香<sup>ニ</sup>変<sup>フ</sup>じ、三<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>味<sup>ニ</sup>変<sup>フ</sup>じ、四<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>の外<sup>ハ</sup>、色<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>味<sup>ヲ</sup>尽<sup>ク</sup>去<sup>ル</sup>。

▽(荔枝は) もし元の枝を離れると、一日で色が変わり、二日で香りが変わり、三日で味が変わり、四五日以降は、色も香りも味も皆なくなってしまう。

「而」は、時間を表す数量詞と共に用いることもある。

右の例、荔枝はライチって言った方がわかるかな？

あの絶世の美女楊貴妃が大好きだった果物だ。

それが日が経ると共に変化していく様を述べた文だよ。

「一日」「二日」「三日」という時間を表す数量詞と共に用いられて、述語「変<sup>ス</sup>」を連用修飾してる。いいかい？「一日で変わる」んであって、「一日、そして変わる」という意味じゃないんだ。

日と共にどんどん食味が悪くなるわけだから、楊貴妃も早馬で運ばせたんだね。

其<sup>レ</sup>御<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>妻<sup>ヲ</sup>從<sup>リ</sup>門<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>關<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>夫<sup>ヲ</sup>。

▼其<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>妻<sup>ヲ</sup>門<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>より其<sup>ノ</sup>夫<sup>ヲ</sup>を關<sup>ス</sup>。

▽その(=晏子の) 御者の妻が門の間から自分の夫(の様子)をうかがった。

「而」の連用修飾の働きの最後が、前置詞句と共に用いられる用法だ。

ここでは「從<sup>リ</sup>門<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>」という前置詞句と共に用いて述語「關<sup>ス</sup>」を連用修飾してるんだ。

「門の間に従って、そして…」じゃないぞー！

◎ポイント!…接続詞「而」は、形容詞や状況・方策を表す句、時間を表す名詞、前置詞句と共に用いて、述語を連用修飾する関係を表すことがある。

・訓読では、文中においては「而」を置き字として読まず、直前に読む語に「テ」や「シテ」などをつけて読む。

#### ④ 接続詞「而」（逆接の関係）

順接とならんで、教室では最初に習う用法が、この**逆接の関係**だね。  
前の語と後の語、前句と後句が、逆の関係になっていることを表す。

子欲養而親不待。

▼子養はんと欲すれども親待たず。

▽子は（親を）養おうとするが親は（すでに亡くなっていて）待ってくれない。

「而」は前後の句や文が逆接の関係であることを表すこともあるんだ。

ここでは「子が養おうとすること」「親が待たない」ことが前後で逆接の関係になってるわけだ。  
君らもそのうち親孝行するなんてぐずぐずしていると、親は待ってくれないんだぞ。

訓読では、接続詞「而」の働きを「欲」の送り仮名に「ドモ」や「ニ」「モ」をつけて読むことが多い。  
この例も「欲スルニ」「欲スルモ」と読まれる場合もあるよ。

◎ポイント……接続詞「而」は、句と句、文と文が逆接の関係であることを表すことがある。

・訓読では、文中においては「而」を置き字として読まず、直前に読む語に「ドモ」「ニ」「モ」などをつけて読む。

#### ⑤ 接続詞「而」（その他の関係）

接続詞「而」の用法には、これまで述べた以外にも、累加や条件を表したり、意外性を表したり、さまざまなきがあるんだ。

「而」といえば順接か逆接だなんていい加減に覚えとくと、足下すくわれるぜ。

其師老矣。而不設備。

▼其の師老いたり。而も備へを設けず。

▽その（＝楚の）軍は疲れ切っている。その上に備えも設けていない。

まずは累加だ。

前文や前句で述べられた状況に、さらに後文または後句で述べる状況も付け加わる関係だよ。

ここでは前で「楚の軍が疲れ切っている」と述べた内容に、さらに「備えも設けていない」という内容が付け加わることを「而」が示してるんだ。

並列や順接の関係と同じように読めばいいんだが、文頭で用いられる時は、「而<sup>しか</sup>」と読んだりする。「而<sup>しか</sup>シテ」と読む場合もあるな。

## 上下交征<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>、而<sup>レ</sup>国危<sup>レ</sup>矣。

▼上下交<sup>上下</sup>利<sup>利</sup>を征<sup>征</sup>むれば、国危<sup>国危</sup>ふし。

▽上の者も下の者も互いに利益を求めるようだと、国が危うい。

次は条件だ。

「而」が前句と後句を接続して、前の条件に基づくと後の結果になるってことを表す。

つまりこの例は、「上下の者が利益を求め合う」という条件だと、「国が危うくなる」という結果になるわけ。

接続詞「則<sup>則</sup>」と同じ働きだな。

「而」自体を置き字とせずに「すなはち」と読むことだってあるぜ。

## 管氏<sup>管氏</sup>而<sup>而</sup>知<sup>知</sup>礼<sup>礼</sup>、孰<sup>孰</sup>不<sup>不</sup>知<sup>知</sup>礼<sup>礼</sup>。

▼管氏<sup>管氏</sup>にして礼<sup>礼</sup>を知ら<sup>知</sup>ば、孰<sup>孰</sup>か礼<sup>礼</sup>を知ら<sup>知</sup>ざらむ。

▽管氏（＝管仲）がもし礼を理解しているなら、誰が礼を理解していないだろうか。（誰でも礼を理解していることになる。）

今度は仮定だよ。

仮定文における前節で主語と述語の間に置かれて、「くがもしくなら」という仮定を表すんだ。

この例では、前節の主語「管氏」と述語「知」の間に接続詞「而」が置かれることで、「管氏がもし知っているなら」という仮定を表すことになるわけ。

主語に「ニシテ」をつけて訓読することが多いな。

## 斯<sup>斯</sup>人也<sup>也</sup>、而<sup>而</sup>有<sup>有</sup>斯<sup>斯</sup>疾<sup>疾</sup>也。

▼斯この人にして斯この疾やまひ有あるなり。

▽こんな（立派な）人でありながら、こんな病気になるのだ。

これは**意外性**。

仮定の例とよく似てるのだが、これは主語と述語の間に置かれて、「〜でありながら」という意外な気持ちを表す。

仮定とどこが違うかっていうと、後の部分が前節の仮定の結果を表さないところだよ。

孔子が、悪疾にかかった弟子の伯牛はくまゆうを見舞った時の言葉で、これほどのすぐれた人物が悪疾にかかるという意外性を嘆いたものなんだ。

これも主語に「ニシテ」をつけて読む。

◎ポイント…接続詞「而」は、累加や条件、仮定の関係や意外性を表すことがある。

・文意によって「而しか」と読んだり、「而すなはち」と読まれることもある。

以上で「而」は終わりだよ。

### 3. 接続詞「与」

接続詞の2つめは「与」だ。

あれ？これ前に前置詞って習ったよ？と思った君、なかなかよく覚えてるじゃないか。

でも、「与」には接続詞の用法もあるんだ。

前置詞「与」を説明した時に、ちよつと触れたよな。

お店で売ってる漢文の参考書なんかには、並列と従属の用法と2つ挙げられてるんだが、従属は英語の「with」に近くて前置詞の用法、並列は「and」で、接続詞としての「与」にあたるってよく説明されるね。

**彼ト与レ彼ト、年相若ケレ也、道相タ似タ也。**

▼彼かれと彼かれとは、年相若としあひしけり、道相みちあひに似にたり。

▽彼と彼は、年齢が互いに同じぐらいで、学んだ道も互によく似ている。

この「与」は、巷の参考書ふうにいえば、「彼and彼」の「and」に相当して、語と語を並列に接続して

1つの名詞句を作ってる。

でも、前置詞「与」の時に説明したように、「与」はもともと「仲間になる・仲間にする」という意味の字だから、「A与B」が「AとB」という意味を表す、いわゆる並列の場合でも、本来は「Aと、それと仲間にするB」という意味で、Aの方に主があつた表現なんだ。

右の例なら、初めの「彼」の方に主が置かれていて、後の「彼」はそれに付け加えられたものなんだ。なんだかよくわからないって？

だったら、この例を次のように読み替えてみよう。

### 彼<sup>ハ</sup>与<sup>レ</sup>彼、年相若<sup>ヤウ</sup>也、道相似<sup>タリ</sup>也。

「彼は彼と、年齢が互いに同じぐらいで、学んだ道も互によく似ている」って意味になって、主語が初めの「彼」になるよね。

この文、「彼と彼」が主語なのか、初めの「彼」だけが主語なのか、前後の文脈なしには判定しかねるだろう？

そうなるよ、どうやって区別するんだ！ってフツフツ怒りすらわいてくるだろう？

でもな、もともと根は同じなんだよ、「与」の前置詞と接続詞の用法って。

どっちでもとれる例なんていくらでもあるさ。

そしてどっちで解釈したって、主は初めの「彼」にあるのさ。

わかった？

さて、並列として読む時、「彼与彼」と読みたいかもしれんが、漢文訓読ではそういう読み方はしないんだ。

「AとB」なら「A<sup>ト</sup>与<sup>ト</sup>B」と必ず返って読む。

訓読の約束事だから覚えとけ。

これは前置詞「与」の場合、Aが省略されて「与B」という形をとることもあるけど、それじゃ読みようがなくなるだろ？

接続詞の場合もそれに準じてるんだろうと思うけど、もともとAの方に主がある「与」だから、きわめて合理的な読み方というべきだよ。

ただし、口語訳は「AとBと」と訳す必要はない、「AとB」で十分だよ。

◎ポイント……接続詞「与」は、英語の「and」。前置詞の「与」と区別しよう。

・「A<sup>ト</sup>与<sup>ト</sup>B」の返り点と送り仮名の付け方に注意！

接続詞「与」には、「と」と読んで並列を表す用法以外に、もう一つ比較選択を表したり、問いかけたりする用法がある。

この場合は「と」とは読まないんだ。

与<sup>リハ</sup>殺<sup>サツ</sup>無<sup>ム</sup>辜<sup>コ</sup>、寧<sup>ロ</sup>赦<sup>セ</sup>有<sup>ユ</sup>罪<sup>ズイ</sup>。

▼辜<sup>つみな</sup>無<sup>な</sup>きを殺<sup>ころ</sup>さんよりは、寧<sup>むし</sup>ろ罪<sup>つみあ</sup>有<sup>あ</sup>るを赦<sup>ゆる</sup>さん。

▽無<sup>な</sup>美<sup>み</sup>の者を罰<sup>ばつ</sup>するよりは、罪<sup>つみ</sup>あるものを許<sup>ゆる</sup>すほうがよい。

接続詞「与」が比較選択を表す時は、必ず前句と後句からなる複文の前句に用いられるんだ。

この場合は「より」とか「よりは」と読む。

そして後句に「寧<sup>むし</sup>ろ」という語や、「孰<sup>い</sup>若<sup>し</sup>」「不<sup>な</sup>如<sup>じか</sup>」などの句を置いて、呼応する形で用いられる。

多くの場合、「与」を用いた前句で選ぶべきでない内容を述べて、それと比べて本来選ぶべき内容が後句であるという形で用いられるんだ。

右の例でもそうなるだろうか？

この用法の「与」は「より」より「と」訳してはいるけど、前にも述べたように「与」が「仲間になる」を原義とするから、「を仲間にして比べると」とか「を仲間にして比べて」の意で用いられてるんだ。

本来の読みを使つていうと、「をすることとは」ってことだよ。

だから、「与<sup>リハ</sup>A、寧<sup>ロ</sup>B」は、「Aすることと比べたら、Bする方がよい」から、「Aするより、Bする方がよい」という意味になる。

「与<sup>リハ</sup>A、孰<sup>い</sup>若<sup>し</sup>B」の場合なら、「Aすることと比べて、どんな点でBすることに及ぶ？」から、「Aするのは、Bするのと比べてどうか」と訳す。

また、「与<sup>リハ</sup>A、不<sup>な</sup>如<sup>じか</sup>B」は、「Aすることと比べると、Bすることには及ばない」から、「Aするより、Bする方がよい」という意味になるわけだ。

まあ、これは基本構造の学習を済ませて、次のステップだな。

#### 4. 接続詞「然」

「然」は、単独では主に「しかし」とか「それなのに」って逆接を表す。

順接のこともあるんだが、出会う機会は比較的少ないかな。

神農<sup>ハ</sup>非<sup>レ</sup>高<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>黃帝<sup>一</sup>也。然<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>尊<sup>ハ</sup>者、以<sup>テ</sup>適<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>時<sup>一</sup>也。

▼神農は黃帝より高きに非ざるなり。然るに其の名の尊ばれるは、時に適ふを以てなり。

▽神農（＝古代の伝説の帝王の名）は黃帝（＝同上）よりすぐれていたのではないのである。しかしその名が尊ばれるのは、時勢に合ったことを行ったことによるのだ。

「神農が黃帝よりすぐれていたわけではない」と前文で述べられてるだろ？

そのことに対して、「しかし（または、それなのに）黃帝よりも名が尊ばれている」という逆接の関係を「然」が表してるんだ。

こういう場合、訓読では「しかルニ」とか、「しかレドモ」「しかモ」なんていくつか読み方がある。

どれも読み方として逆接って感じが伝わる読みだけど、実際に教科書や参考書、あるいは入試問題なんかを見てると、時には「しかシテ」なんて読まれている場合もある。

右の例なら、「神農は高きに黃帝より高きに非ざるなり。然して其の名の尊ばれるは…」と読むわけだ。このへんの事情は、「而」が逆接の場合でも「しかシテ」って読むことがあるのと同じ。要するに日本語の問題だよ。

◎ポイント……接続詞「然」は、単独では逆接でよく用いられる。

・「然」「然」と読んで、「かつ」の意。

## 5. 接続詞「然而」

接続詞「然」は他の語と複合した接続詞として用いられることが多いんだ。

まずは同じ接続詞「而」と複合した「然而」だよ。

「然」単独で逆接でよく用いられたように、こいつも逆接でよく用いられて、「然ではあるが「とか」それなのに」なんて意味を表す。

市之無虎明矣。然而三人言而成虎。

▼市の虎無きこと明らかなり。然れども三人言へば虎を成す。

▽市場に虎がないことは明らかである。そうであっても三人（の人が市場に虎がいると）言えば、虎を作り上げる（＝虎がいることになん）。。

前の句で「虎がないことは明らかだ」って言うてるだろう？

それに対して後句では「虎がいることになる」という反対の内容になっている。

だから、「然而」は「そうではあるが」とか「しかし」、「そうではあっても」など、逆接を示してるんだ。

「しかレドモ」と読むんだが、「しかりしかシテ」「しかりしかうシテ」と読むこともあるよ。

さて、この例文も「三人虎を成す」という有名なお話だ。

戦国時代、魏の国の王が、趙の国と友好関係を結ぼうとして、自分の太子を人質として趙の都邯鄲かんたんに送ったんだ。

そのとき、龐葱ほうそうつて人を付き人にしたんだ。

そしたら魏を離れるにあたって、この龐葱、自分がいなくなった後、自分と仲の悪い連中が王様に悪口を吹き込むことを心配して、ひとこと言っておこうと思いつく。

龐葱、王様に向かっておもむろに、「王様、もし市場に虎が出たと誰かが申しましたら、王様はお信じになりますか？」と聞く。

王様、「いや、信じんわい。」と答える。

また龐葱が「もう1人別の者が、市場に虎が出たと申せば、いかがですか？」という。

王様、「やや、半信半疑じゃのう。」

「では、さらに3人めの者が、市場に虎が出たと申せば、いかがなさいますか？」

ここで王様、「むむむ、信じるであろうのう。」と答える。

そこで龐葱は言っただ、「王様、市場に虎など出ぬことはわかりきったことでございます。それでも3人の者が出ると申せば、虎はいることになってしまいます。私、このたび遠く邯鄲へ参りますが、私のことを悪しあ様に申すものは3人どころではございませんまい。」

王様は、龐葱のいわんとすることを悟って、「うむ、わかった。讒言ざんげんなど信じないようにしよう。」と言ったわけなんだが…

やがて龐葱が魏に戻ってきた時には、目通りすらかなわなかったんだよ。

怖いねえ…中傷つて。

◎ポイント…接続詞「然而」も逆接でよく用いられます。

・「然而」と読んで、「しかし」「そつではあるが」「そつではあっても」の意。  
逆接であっても、「然し而シテ」「然し而シテ」と読まれることもめづる。

## 6. 接続詞「然後」

次に「然」が時間を表す名詞の「後」と複合した「然後」だよ。

これは「しかルのち」って読むから、「その後で」と訳したくなるんだが、もうちょっと違うニュアンスもあって、「そうしてはじめて」って意味を表すことも多いんだ。

子貢反、築室於場、独居三年、然後歸。

▼子貢反り、室を場に築き、ひとり居ること三年にして、然後に歸る。

▽子貢は（孔子を葬った墓地に）引き返し、小屋を墓前の空き地に建て、ひとり三年住んで（＝墓守をして、その後で（郷里に）帰った。

この例は、孔子の高弟の子貢が、孔子の死後3年間墓守をし、「その後で」郷里に帰ったわけだな。だから「その後で」って訳していい。

世有伯樂、然後有千里馬。

▼世に伯樂有りて、然後に千里の馬有り。

▽世に馬の真価を見極める人がいて、はじめて一日に千里走る名馬がいる。

ところが、この例の場合、「その後で」って訳したら、なんとなく変な感じだろ？

名馬の真価というものは、馬の真価を見極めることのできる人がいて、「そうしてはじめて」世に名馬がいる、すなわち名馬の真価が世に明らかになるわけだから、「その後で」っていうのも、もちろん間違いないが、これはむしろ前に述べられた条件をクリアして、はじめて結果が出るって感じだよな。

「然後」は、こういう意味も表すんだってことを覚えたいほしい。

ちなみに、「伯樂」ってのは、馬の善し悪しを見極める人から転じて、今では人の才能を見抜いて、人材を育て上げることのできる人って意味で使われてるんだ、知っつけ。

◎ポイント……接続詞「然後」は、「その後で」だけではなく、「そうしてはじめて」という意味を表すところもある。

・「然後」と読む。

## 7. 接続詞「則」

次の接続詞は「則」だ。

「すなはち」って読む。

**前句で条件、後句で結果を表す文の、後句の先頭で用いられることが多い。**

「くスレバ、則ち」って訓読することが多いから、昔から「レバ則」なんて言い習わされたりする。

この「則」は、ほんとは実にさまざまの意味を表すんだが、**基本は「くする場合・くである場合」**だ。ここでは一番大事な、その条件を表す用法だけ説明しよう。

**楚 疆 則 秦 弱、秦 疆 則 楚 弱。**

▼楚疆ければ則ち秦弱く、秦疆ければ楚弱し。

▽楚の国が強くなれば秦の国は弱まるし、秦の国が強くなると楚の国は弱まる。

それぞれ、「楚が強くなる」ことが「秦が弱まる」の条件、「秦が強くなる」ことが「楚が弱まる」の条件になってるだろう？

こんなふうに「則」は用いられるんだ。

「則」を「その時には・その場合は」と置き換えてみるとわかりやすいかな。

◎ポイント……接続詞「則」は、前句が条件、後句が結果を表す文の間で用いられて、「くすれば」「くする時には」という意味を表す。

・「A スレバ すなはち B ス」の形をとることが多いので、「レバ則」といわれる。

## 8. 接続詞「然則」

さっきの「然」と「則」の合体形だな。

これがまたよく用いられるんだ。

通常、「しかラバすなはち」って読む。

**前の内容を受けて、「それでは」とか「そうであるなら」「そうであるからには」という意味を表す。**

子貢問、「師与商也孰賢。」子曰、「師也過、商也不及。」曰、「然則師愈与。」

▼子貢問ふ、「師と商と孰れか賢なる。」と。子曰はく、「師や過ぎたり、商や及ばず。」と。曰はく、「然らば則ち師は愈れるか。」と。

▽子貢が質問するには、「師」＝子張の名(と商)＝子夏の名(とはどちらがすぐれていますか。」「と。先生がおっしゃるには、「師は行き過ぎているし、商は及ばない。」と。(子貢が)言うことには、「それでは師はまさっているのですか。」

孔子が子張は過ぎているし、子夏は及ばないと述べたことに対して、弟子の子貢が、「そうであるなら子張の方がまさっているのかと推定したわけだ。

この話、この後、孔子が何て言ったか知ってるだろう? 「過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし」だよ。超有名な言葉だよな。

「行き過ぎてるのは及ばないのと同じだよ」ってことだ。

◎ポイント……接続詞「然則」は、前の内容を受けて、「それでは」「そうであるなら」「という意味を表す。

・「然則」と読む。

実は、この「然則」は、「そうではあるが」という逆接を表すこともまれにあるんだが、その場合でも「しかラバすなはチ」って読むのが普通だよ。

## 9. 接続詞「因」「因而」

「因」はもとは前置詞で、「因」の形で「〜のために」とか「〜の機会に」などの意味を表す語だ。その働きが虚化して、単独で接続詞として用いられるようになったんだ。

「原因」という熟語があるじゃないか。だからなんとなく意味は予想できるだろう?

兔走触株、折頸而死。因积其耒而守株、冀復得兔。

▼兔走りて株に触れ、頸を折りて死す。因りて其の耒を积りて株を守り、復た兔を得んことを冀ふ。

▽兎が走ってきて切り株にぶつかり、首を折って死んだ。そこで自分のすきを放り出して切り株を見守り、また兎を手に入れることを望んだ。

この例はさすがに見覚えがあるだろう？

1年生の教科書にはたいがい載ってる「守株」(株を守る)だよ。  
ためぐち先生が思うに、このウサギはきつと何かに追われて来たんだろうな。  
でなきゃ、どこに切り株に蹴つまづいて首の骨折る馬鹿なやつがいる？

と、まあそれはおいといて、畑を耕してた農夫はウサギが切り株にぶつかって死んだのを見て、「そこで鋤を放り出してまた同じことが起きるのを待ったんだ。

「**因**」は、**前で述べられた内容と緊密に関わって、後の行為や状況が起きることを表す**んだよ。  
「そこで」って訳すといいかな。

つまり、後で述べられることの「原因」や「要因」になる事情が前にあるわけだな。

「**因**」は接続詞「**而**」と複合して「**因而**」の形でも用いられるぞ。

**蔡大驚曰、真吾妹也。因而泣下。**

▼蔡大いに驚きて曰はく、「真に吾が妹なり。」と。因りて泣下る。

▽蔡がとても驚いて言うことには、「本当に私の妹だ。」と。そこですぐに涙が流れた。

なんとまあ目の前の女性が自分の妹だとわかったんだよ。

「そこで」に「涙がこぼれたんだ。そりゃびつくりするわ、うれしいわな。

「**因而**」は、前の内容を受けて、それと関わって後句の行為や状況が起きることを表す。

「そこで」とか「そして」に「なんて意味を表すんだ。

◎ポイント！…接続詞「**因**」「**因而**」は、前の内容を原因・要因として、後の行為や状況が起きることを表す。よちよちよ「よここ」を読む。

・「**因**」…「**因而**」  
・「**因**」…「**因而**」  
・「**因**」…「**因而**」  
・「**因**」…「**因而**」

## 10・接続詞「是故」「是以」「是用」

この3つ、全部ほぼ同じ意味を表すんだ。

「だから」「それゆえ」だよ。

ただし、読み方に注意してほしい。

「是故」は「このゆゑ」で覚えやすいんだが、「是以」と「是用」は「このヨもつテ」と読むことに注意してくれ。

いいかい？今すぐ頭のノートに書き付けとけよ。

特に「是以」の読みは入試でもよく聞かれるんだ。

玉不琢不成器、人不学不知道。是故古之王者、建国君民、  
教学为<sub>レ</sub>先。

▼玉は琢かざれば器を成さず、人は学ばざれば道を知らず。是の故に古の王は、国を建て民に君たるに、教学を先と為す。

▽玉はみがかなければ器とならず、人は学ばなければ道を知ることにはできない。それゆえに昔の王は、国を建て民に君主となるにあたり、教化と学習を第一とした。

特に最初の1文、心に響くなあ：

学問つてのは大学合格や就職のためにするんじゃないんだよ。

人間を磨くためなんだ。

そう思うと勉強も殺伐とした感じじゃなくなるだろ？

君らが今一所懸命に学んでるのは、君らを人として磨いてるんだよ。

さて、この例、人は学問をしなければ人の道を理解することはないという内容を受けて、「それゆえに」

古代の聖王が教学を第1としたという結果を述べてるわけ。

往年、呉公吮其父、其父戰不旋踵、遂死於敵。呉公今又吮其子。妾不知其死所矣。是以哭之。

▼往年、呉公其の父を吮ひ、其の父戦ひて踵を旋さず、遂に敵に死す。呉公今又其の子を吮ふ。妾其の死する所を知らず。是を以て之を哭す。

▽過ぐる年、呉公（＝呉起將軍）は、その（＝我が子の）父（の腫れ物のうみ）を吸ってください、その父は戦つて敵に背を向けずに、敵に殺されました。呉公は今またその子（の腫れ物のうみ）を吸ってくださいました。私は我が子の死に場所がわかりません（＝私の知らないところで死ぬことになるでしょう。）それゆえ

に泣いているのです。

呉起つてのは、孫子と並んで有名な戦国時代の兵法家だよ。

その呉起は兵卒をとても大切にしたんだ。

1人の兵卒が腫れ物を病んでた時、いいかい？なんと呉起はその腫れ物の膿うみに口つけて吸い出してやったんだ。

おえっ…普通できることじゃないだろ？

それを聞いた兵卒の母親が、泣きながら呉起に言った言葉が、右の例だ。

一兵士に過ぎない息子の膿を、將軍自ら吸ってくださった以上、必ず息子は將軍のために命を顧みずに戦って死ぬことになるという内容を受けて、「それゆえに」泣いているのですという訴えなのさ。

つまり、「是故」も「是以」も、前に述べられた内容を受けて、その結果として後の行為や状況を述べる時に使うんだ。「だから」とか「そのゆえに」って訳せばいい。

「是用」も「是以」と同じ意味で、読み方も「ここのヨもつテ」って読む。

ところで、この「是以」は試験で読みがよく出題されるんだが、よく「これヲもつテ」と読み間違えるんだ。

ほんとびっくりするほどその間違いが多い。

「これヲもつテ」と読むのは「以是」だよ。まず、その読み方の違いを頭の中にたたき込んでくれ。

ところで、「以是」も「それゆえ」とか「だから」という意味を表すことがあるよな？

「是以」とどう違うんだらうって思わないかい？

実は、前置詞「以」を学習済みの諸君の中には、ある程度察しがついている人もいるかもしれないが、「以是」は前置詞句だよ。

だから「以」前置詞句と述語との関係で、「これを用いて」って意味を表すこともあれば、「これを理由に」という意味を表すことだってある。

「それゆえ」とか「だから」という意味を表すのは後者の場合だな。

つまり、「以是」自体が複数の意味をもつから、文脈の中で、どの意味で用いられているのか判断しなきゃならないわけだ。

それに対して「是以」は、「だから」という意味を表す、それ自体が1つの接続詞なんだよ。

「是故」と同じだと考えていい。

したがって「これを用いて」なんて意味はもちろん表さない。

要するに、前置詞句「以是」が、その前置詞の働きゆえに、たまたま「是以」と同じ意味を表すことがあるってことなんだ。

な？すつきりしたろ？

◎ポイント…接続詞「是故」「是以」「是用」は、すべて「だから」「それゆえ」という意味を表し、前の内容を受けて、その結果を表す。

・「是以」を「これヲもつテ」と読み間違えないこと。

## 11・接続詞「雖」

これは大事な接続詞だぞ！気を入れて聞けよ！

でも、「いえども」って言葉自体は耳にしたことがあるはず。

「天才といえども、この問題は解けないよ」って、意味わかるだろ？

「天才だって、解けない」って意味だよな？

この「いえども」が「雖」を訓読したことばなんだ。

そうだ、最初にこの「いえども」という日本語に着目してみよう。

「いえども」ってのは、日本語の古典文法に忠実に訳したら「言っけれども」という意味になるだろ？

でも、そういう意味じゃないってのはわかるかい？

まずそのことを押さえておこう。

「いえども」は「言っけれども」じゃないんだぞ！

さて、その「雖」は譲歩の接続詞って言われるんだが、大きくわけて3つの意味がある。**譲歩の仮定条件、**

**譲歩の確定条件、そして抑揚、**この3つだよ。

### ①接続詞「雖」（譲歩の仮定条件）

譲歩の接続詞というのは、あるラインまでは譲歩するという意味を表す接続詞だ。

そして、**ここ**でいう**譲歩の仮定条件**というのは、「**かりにあるラインまで譲歩したとしても**」ってこと。

だから、「たとえくても」って意味を表すわけ。

**雖<sub>レ</sub>死<sub>ス</sub>、不<sub>レ</sub>悔<sub>イ</sub>。**

▼死<sub>ス</sub>と雖<sub>レ</sub>も、悔<sub>イ</sub>ず。

▽たとえ死んでも、悔いない。

たとえば、「君の恋人になれたら、たとえ死んでも後悔しない。」って場合さ、「じゃあ、死んでみせて！」と言われたらどうする？

まあ中にはほんとに死んでみせるような「大人物」!?もいるかもしれないが、たいがいは「い、いや、それは…」って尻込みするだろ？

つまりあくまで仮定なんだよ。

この「死すと雖も」ってのは、要するに「かりに死ぬところまで譲歩したとしても」ってことだ。

「かりに」ってところが大事だよ。

じゃないと、命いくつあっても足りないじゃないか。

ここで大切なのは、この「**雖**」は、常に**複文前句の先頭か、または主語のすぐ後に置かれる**ということ。もし「**ば**」とか「たとえても、…」という意味を表す文は、必ず前句と後句からなる複文で構成されるよな？

右の例なら、「**雖**死」(たとえ死んでも)が前句、「**不**悔」(悔いない)が後句だよ。

「**雖**」は前句の先頭に置かれてるだろ？

もし、主語を置けば「**我** **雖**死」になる。

つまり「**雖**」は主語「**我**」のすぐ後に置く。

これは他の仮定の接続詞「**如**」「**若**」「**苟**」(もし「**ば**」、譲歩の「**縱**」(たとえても)でもみな同じだよ。

時々巷に売ってる参考書に「**雖**」が主語を前に伴う時は「**く**だが・**く**だけでも」という意味だなんて書いてることがある。

つまり言い換えると主語を伴ってる時は仮定ではないということになるわけだが、はい、嘘っぱちです！(きっぱり！)

そういうこと書く人ってのは、膨大な用例にあたらずに書いてるいい加減な人なんだ。いくらでもあるんだよ、主語を伴っても仮定を表すことなんてさ。

◎ポイント！…接続詞「**雖**」は、複文の前句の先頭もしくは主語のすぐ後に置かれて、譲歩の仮定条件「たとえても」という意味を表す。

## ②接続詞「**雖**」(譲歩の確定条件)

次は譲歩の確定条件だけ。

**譲歩の確定条件というのは、「あるラインまでは譲歩するが」ってこと。**

仮定条件は「たとえても」って意味だったろ？

つまりあくまで仮に定めた条件であって事実じゃないんだ。  
ところが、この確定条件は読んで字のごとく、確かに定まった条件だ。事実なんだよ。  
「くだが」とか「くだけれども」ってのが譲歩の確定条件さ。

### 臣<sub>シ</sub>雖<sub>レ</sub>老<sub>シ</sub>、心<sub>シ</sub>力<sub>シ</sub>猶<sub>ホ</sub>可<sub>シ</sub>用<sub>ル</sub>。

▼臣<sub>シ</sub>老<sub>シ</sub>いたりと雖<sub>ホ</sub>も、心<sub>シ</sub>力<sub>シ</sub>猶<sub>ホ</sub>ほ用<sub>ル</sub>ゐるべし。

▽私は老いさらばえましたが、知恵も力もまだ用いることができます。

これがもし譲歩の仮定条件で「たとえ老いたとしても」と解釈したら、実際は老いてないってことになる  
だろ？

違うよ、実際老いさらばえちゃってるんだよ。

つまり、「自身の老化は譲歩して認めます、でも…」ってことなんだ。

だから確定なのさ、自身の老化はすでに確かに定まっていることだろ？

「我<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>愚<sub>ク</sub>」みたいな表現もよくあるけど、これだって「私はたとえ愚かであっても」って解した  
ら、実際は愚かじゃないと言ってるみたいで、不遜極まりないだろ？

いやいや、「愚かだと譲歩して認めます、でも」なんだよ。わかったかい？

◎ポイント…接続詞「雖<sub>レ</sub>」は、複文の前句の先頭もしくは主語のすぐ後に置かれて、譲歩の確定条件「く(だ)が・く(だ)けれども」という意味を表す。

### ③接続詞「雖<sub>レ</sub>」(抑揚)

「雖<sub>レ</sub>」の用法には、譲歩の仮定条件と譲歩の確定条件以外に、もう一つ抑揚の用法がある。  
なにそれ？って？

つまりな、「こんなことは子供でさえわかる。まして大の大人はなおさらだ。」みたいな文がそれ。

この抑揚表現は漢文の大事な表現形式なんで、いずれちゃんとマスターしてもらわなきゃならんんだけど、  
ここでは「雖<sub>レ</sub>」も使われることがあるんだということを言っとくのかな。

### 雖<sub>レ</sub>吳<sub>中</sub>子弟<sub>一</sub>皆<sub>一</sub>已<sub>レ</sub>憚<sub>ル</sub>籍<sub>ヲ</sub>矣。

▼吳<sub>中</sub>の子弟<sub>一</sub>と雖<sub>レ</sub>も皆<sub>一</sub>已<sub>レ</sub>に籍<sub>ヲ</sub>を憚<sub>ル</sub>。

▽(項羽が住む)吳中の若者でさえ、みな籍(＝項羽)を恐れ避けるようになっていた。

籍つてのはあの「項羽と劉邦」の項羽のことだったよな。

なにしろ身長が当時の平均をはるかに越えてて、あほみたいに重い鼎かなえを楽々持ち上げる馬鹿力の持ち主だったんで、本来仲間であるはずの呉中の若者でさえ恐れられた。

言外に「まして他の人たちはいうまでもなく恐れ避けた」という意味がこめられてるのはわかるよな？

それをもし漢文で表現すれば、「況衆人乎」（まして他の人はなおさらだ）ってなる。

ま、こういう用法もあるってこと、頭の片隅に書き付けといてくれ。

## 12・接続詞「雖然」

さて、この講義の最後が、この「雖然」だ。「しかリトいへども」と読む。

今でも古風な言い方で使ったりするんで、聞き覚えがあったりしないかい？

前の内容を踏まえて、「そうではあるが」って意味で使ってるんだよ。

**諸侯之礼、吾未之学也。雖然吾嘗聞之矣。**

▼諸侯の礼は、吾未だ之を学ばざるなり。然りと雖も吾嘗て之を聞けり。

▽諸侯の礼は、私はまだ学んでいません。そうではありますが私は以前こんなことを聞いたことがありません。

「然」は指示代詞だよ。「その」「その」で「然」という意味。

それと接続詞の「雖」からなっていて、「雖然」で「そうではあるが」という意味を表す。

右の例なら、前の文の「諸侯の礼は学んでいない」という内容を受けて、「そうではあるが前にこんなことを聞いたことがある」って逆接でつないでるんだ。

この「雖然」は、唐代以降になると、指示代詞「然」の意味が薄らいじやって接尾語化して、「雖然」2字で「雖」一字と同じ働き、つまり「〜ではあるが」という意味を表すようになる。

現代中国語でも使われてるんだぜ。

◎ポイント……接続詞「雖然」は、前の文の内容を受けて「そうではあるが」という意味を表す。

「しかリトいへども」と読む。

接続詞には、他にもいっぱいある。

「如<sup>もつ</sup>」とか「苟<sup>いやしつ</sup>」みたいに順接の仮定条件を表したり、「縦<sup>たど</sup>」のように譲歩の仮定条件を表す接続詞は特に大事。

でも、ここではそもそも接続詞って何だ？ということを理解してもらうために、よく使われる代表的なものを挙げるにとどめたんだ。

これで終わりってわけじゃない、奥が深いんだよ、漢文は。

さて、好学の諸君、よくがんばったね！

これで漢文の基本構造の講義は終了だ。

あとは、受身とか使役とか疑問とか…いろいろな句式に触れて、それがなぜそういう意味を表すのか、構造に照らして理解するようにしてくれ。

卒業だよ！おめでとう！

印刷・配布禁止

本稿は、著作権で保護されており、無断転載を禁じます。  
商用利用は一切不可。学校等の授業での利用については、ご相談に応じます。  
利用料等を頂戴することはありません。  
次のメールアドレスにて、ご連絡ください。

<https://xuexi.mokuren.ne.jp/mail/index.html>